

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Volume2

Chapter 4 Social Practice and Register – Language as Means of Learning –

Bernard A. Mohan

発表の構成

- 1) 著者紹介
- 2) 本発表の構成
- 3) 本発表の要約
- 4) 考察
- 5) 参考文献

【注意 閲覧者の方へ】

この資料は、東京学芸大学大学院教育学研究科国語教育専攻日本語教育コースの「日本語教育研究法 B」(担当：南浦 涼介) ので取り扱った Hinkel (ed) (2011). Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning の Chapter1 の発表資料です。教育的価値、資料的価値としてウェブ掲載をしていますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文への引用等にご遠慮ください。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については東京学芸大学南浦研究室 (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/>) までお願いします。

1) 著者紹介

Bernard A. Mohan、

・Milwaukee 大学 (Wisconsin 州、アメリカ) の言語学専攻の教授として働いていた。その後、British Columbia 大学 (カナダ国) にて言語教育専攻の教授として Vancouver 学校の難民の英語教育学習者と関わって研究していた。現在、UBC の名誉教授として働いている。

- ・得意な分野：ヨーロッパ難民の英語教育や、その先生育成分野など
- ・著作：Language and Content (1986) 、A Linguistic Description and Computer Program for Children's Speech(1970)
- ・参考ウェブサイト：【<http://tslater.public.iastate.edu/kf/index.html>】

2) 本論の構成

| 頁 | タイトル | 翻訳タイトル | 主なポイント |
|----|--|-------------------------------------|------------------------------|
| 59 | Magnetism : Social Practice as Reflection, Action and a Framework of Meanings | 磁気力事例：行動・反省・意味的構造としての社会参加型実行 | 小学生との「磁気実験」の実践活動で、概念理解の目的 |
| 63 | Academic Language Socialization of Learners Through Participation in an Online Community of Practice | オンラインコミュニティ実行を通じた社会的なアカデミックレベルの言語育成 | オンライン活動で学習者と母語話者とのディスカッション活動 |
| 67 | Cooperative Learning : Dilemmas of Choice in Social Practice | 協働学習：社会参加型実行の窮地 (ジレンマ) の選択肢 | バイリンガルの学習者の L1 と L2 の使用ジレンマ |
| 69 | The Theory-Practice Dialectic : Reflection Theory | 理論・実行を通じた合理的な議論：反省的理論 | アクションリサーチでの学習法観点の工夫 |

Keyword Social Practice : 社会参加型実行、Socialization : 社会的育成、Cooperative Learning : 協働学習、Dialectic : 合理的な議論、Theory : 理論、Action : 行動、Reflection : 反省、Register : 言語的な方法

3) 本発表の要約

3.1) はじめに

- ・「教育」は学習者の社会参加のための社会的育成 (Socialization) である。言語はその社会的育成の主な道具として扱われている。
- ・現在、言語学的研究は非常に要求されている。最近のアメリカのコンテンツ州地域における難民の英語学習者 (ELLs) を対象とした調査により、難民の英語学習者のアカデミック学心配のリスクが高いと分かり、また、その地域では言語の基本知識だけではなく、「アカデミックリテラシー」が要求されているという。
- ・M.A.K Halliday の Systemic Functional Linguistic (SFL)理論：一つの言語学法で、言語を社会的な意味システム (Social Semiotic System) として検討する理論である。
- ・本チャプターでは4つの実践をもとに、学習者の Action と Reflection 発話に関し、見ていく

3.2) Academic Language Socialization of Learners Through Participation in an Online Community of Practice

事例①：磁気力事例：行動・反省・意味的構造としての社会参加型実行

行動発話 Action Discourse (実行 Practice)：自分で実践を通し、理解したこと。

反省発話 Reflection Discourse (理論 Theory)：実践後の反省・振り返り、文章的な説明

(参考：頁 60 の「A1 - A4 の磁気力理論の定義」)

Mohan と Slater (2005) の磁気実践

対象者：西カナダ、第2言語としての英語学習者 (ESL) 小学1年生と2年生

クラス：科学クラスの「磁気力理論」実践

活動の目的：学習者の子供に実行実践を通し、発見したことを自分なりに説明させることを促す。

学習者が学習した理論：「北極と南極が近くなると、引かれ合う」、「『北極と北極』か『南極と南極』が近くなると、突かれあう」

活動の主な流れ：①先生が学生に磁気バーを使って、紙や木など、様々なものと近くつけさせた。「鍵」との実践の時、引かれなかった。ポイントになった発話は以下の通り

Abby：Hey、It is does not. (え、引かれなないんです)

先生：It does not. Why does not the key...What do you think Janie?

(引かれなないね。どうして鍵は引かれなないの？Janie、どう思う？)

Janie：It does not. That key is small. (引かれなないのはその鍵が小さいんだから)

ポイント：Janie は磁気力がサイズにより、弱く強くなったりするとまとめて判断した。

②今までバー磁気を使っていた実践では最後の実践として「輪型磁気」が導入された。先生は輪型磁気の側を交代しながら、「浮いている」「引かれ合った」実践を学習者に見せた。ポイントの会話は以下。

先生：How do we know? (どうして分かったの？(輪型磁気にも北極と南極がある))

Jack：Because we tried it out (私たちがやってみたから)

先生：And why did we discover? (で、どうやって発見できたの?)

Jack：それはもし先生がそれ(輪型磁気)を回したら引かれなないけど、もう一回回したら、引かれるんだ。

ポイント：Jack は輪型磁気の方も上下に反対の磁気極があると分かった。つまり、彼が磁気概念が分かったまとめ

- ・磁気の実践により、学習者の子供が実行的な実践を通し、理解できた知識構造をもとに、新しく簡単な理論の概念やその検討するため、まとめて説明できたと分かった。
- ・子供は理論・実行的な議論 (Theory-Practice Dialectic) ができた。



3.3) Academic Language Socialization of Learners Through Participation in an Online Community of Practice

実践② オンラインコミュニティ実行を通し、社会的なアカデミックレベルの言語育成

対象者：大学生（第二言語学習者・英語母語話者）

クラス：アカデミック的な英語授業

実践の目的：学習者に新型のディスカッション教授法を提供する。学習者に自然な方法で行動・反省的な実行ができる様、促す。

実践の流れ：①クラス内で教師が学生に課題を挙げる。

②先生に提供したオンラインディスカッション（OD）のHPを通し、学習者に授業の読解課など様々なトピックについて議論や意見交換をさせる。

Action Discourse 行動発話：物理的な行動だけでなく、ODのような活動参加も含める。

Reflection Discourse 反省発話：行動内容を表すこと。つまり、ODについて話すことである。

③一学期で、クラスディスカッション（CD）とオンラインディスカッション（OD）とともに実施させられており、その間、第二言語学習者へのインタビュー活動も行っていた。

感想：対象とされた学生からのOD活動への感想は、特に第二言語学習者の方がいい評価をした人が多く、例としては以下の通りである。

| 学習者 | OD への評価 | インタビューでの感想 |
|-------|----------|--|
| 学習者 B | OD が良い | 最初の時、(OD) 活動に参加したくなく、迷っていたが、… |
| 学習者 C | OD が良い | 「OD」が私の英語を発展してくれている。特にライティング能力 |
| 学習者 F | OD が良くない | アカデミックな範囲なので、OD 中の「個人的な話し」は認められない |
| 学習者 G | OD が良くない | 飽きた話しが好きではない。学校のためではなく、自分のためのライティングだけを期待している |

学習者の感想の考察：第二言語学習者がOD活動に興味を持ったのはいくつかの理由がある。たとえば、

①クラスディスカッション（CD）では伝えたいメッセージをすぐに伝えないといけなく、緊張してしまった学習者や、自分の英語能力にまだ自信がなく、困っている人が多い。よって、冷静に考える時間を提供してくれ、気楽にできるOD活動の方が好きになったという。

②OD活動では書きたい内容を正しくきれいな言葉で伝えられ、自信を作ることができる。

さらに、第二言語学習者があまり気づいていないもう一つのメリットとしては、母語話者の友達からのアカデミック表現の言い換え（Scaffolding）である（参照：頁66中）。学習者HとStudent1（母語話者）のディスカッションから見ると、学習者の「access」や「Because」を、次の発話で母語話者が「accessibility」「seems to play an integral role」に言い換えた。第二言語学習者にとっては勉強になるのではないかと考えられる。

まとめ

OD活動は、社会的育成法として第二言語学習者がアカデミック的な言語の学習にサポートしている。気楽に学習者なりの言葉を伝える場を提供する。それだけでなく、質的な研究のインタビュー活動のActionとReflection発話を通し、学習者に自分なりの「検討」や「評価」を表現させることもできる。

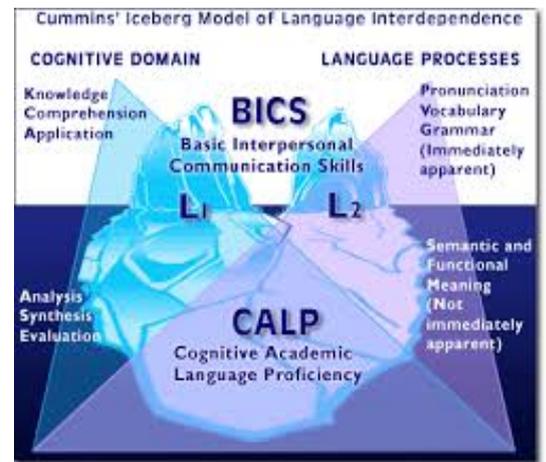
また、母語話者と一緒に実施されたため、「言い換え」機能などの同僚学習活動のメリットも提供することもできる。

3.4) Cooperative Learning : Dilemmas of Choice in Social Practice

実践③：協働的学習：社会参加型実行の窮地（ジレンマ）の選択肢

・ Cooperative learning (協働的学習)は一つの教育的実行としてアカデミックコンテンツ学習だけでなく、アカデミック議論学習にも広く求められている。

・ Slavin (1995)：協働的学習は多様教授法として扱われており、学習者を小グループに分け、お互い助け合い、アカデミック的な知識などを教え合う活動である。



・ 第二言語教育の協働的学習の目標

① アカデミックコンテンツ学習 ②アカデミック発話学習 ③L1のアカデミック発話の知識を維持

・ Cummins の Dual Iceberg モデルにより、①～③の目標は同時に上達すること。もし、L1 の能力が完全に発達された場合、L2 の能力を L1 の同じレベルまで発達することという。

実践対象者：西カナダ、中等学校、ELS プログラムの中国人難民英語第二言語学習者

活動目的：バイリンガル学習者の協働学習活動を考察する。

活動の流れ：①「協働学習の目標」について 49 人の対象学習者へのインタビュー活動を行った。

② 120 人の対象学習者（①の 49 人も含める）を小グループに分けて、グループワーク活動を行った。

③ 先生や研究者が各グループの活動を考察した。

④ インタビュー活動も小グループ活動も録音した。

実践の結果：

① 録音されたデータ（30 時間）により、授業活動でも、中国語の使用が 54%で、英語の使用が 46%だった。

② インタビュー活動の時より、言葉遣いのバリエーションがみられた。

③ 小グループ活動では、課題が分担されたが、担当しているのにやらなかった人がいて、課題を「助け合っ
て」終わらせる目標が成功しなかった。学習者の違う文化社会を持つではないかと考えられる。

対象者の感想

学生 A：問題があったとき、はやく何か知りたいとき、私は友達に中国語で聞く。私は英語に訳し伝えるも、友達に英語で答えるも好きではない。

学生 B：私たちは英語で書く。マンダリンでディスカッション。もっとはやく、分かりやすいからだ。

対象者のジレンマ

① 問題がある場合、友達からプレッシャーをかけられたとき、L1 の中国語で発話する。

② L1 の中国語を使うのは L2 の英語より楽で、伝えたいことを明確に伝えられる。

③ 両親の指摘も、自分の将来のために、英語能力を上達しなければならないのは分かっているため、授業などで、頑張って英語を使う。

まとめ

・ バイリンガルの学習者が言語使用の選択にはいつもジレンマになり困っている。

・ 迷っているときは Reflection 発話であり、選択し、発話したのは Action 発話だった。

・ 各選択肢 (L1 か L2) のメリットとデメリットやその目標を合理的によく考えて判断することが求められる

3.5) The Theory-Practice Dialectic : Reflection Theory

理論・実行を通じた合理的な議論：反省的理論

- ・本実践では学習過程のアクションリサーチにおける社会的実行について検討される。
- ・Beckett (1999) の実践：中学校の ESL 学習者を対象とした。実践目標はアカデミック的・社会的文化社会的育成の発話の便利さを提供するためである。実践活動に関しては、メディア調査での研究、研究計画の立てること、インタビュー調査、クラス発表などだった。だが、対象者からの感想では、1 学習者が 18% しか好きではなかったという。「好きなことの時間が奪われた」という声まであった。
- その原因は参加者がその活動のメリットを理解できなく、彼らが固定言語学習感「Language Code」を持つためである。
- ・以上の結果を予防するため、アクションリサーチ (Action Research) が導入すべき。
- ・AR 活動の目的は教育の社会的行動と理論・行動の合理的な議論と関わっている。
- ・Carr と Kermis (1986) : AR は自己反省の基本の形である。AR は行動を通し、対象者の理解 (誤解) や合理的な観点を工夫させる道具としても扱われている。

Beckett と Slater の実践：

対象者：Canadian 大学、3 クラスの 10 か月留学プログラムの日本語母語話者 57 人

対象者がコンテンツベースの社会的育成法とはまだ慣れていない。

実践機関：14 週間

実践の目的：新しい英語学習方法を紹介し、学習者に様々な学習法を導入できるためである

実践の流れ：

- ① 参加者を小グループに分け、学期プロジェクトの発表を一緒にさせた。
- ② 活動する前、活動内容、レッスンプラン、目的を参加者に伝えた。
- ③ 毎週、参加者が研究プロジェクトについて週刊ポートフォリオを作成していた。
- ④ 毎週、参加者が「Project Framework」に学習したことや、経験について記入していた。
- ⑤ 活動終了前、22 人の参加者へのインタビュー活動を行った

実践結果：実践終了後、参加者により、様々なアカデミックスキルを学習したと判断したという。大体の参加者 (79%) が ESL 学習における「アカデミック的な社会的な育成の学習」が明確に理解できたと認めた。

対象者の感想

学習者 A：私は今回の活動を通し、英語だけでなく、ほかの科目も勉強できたと分かった。一石二鳥したと思う。私はその科目らとの関わりが理解できた。

学習者 B：レポート 15 枚書けるなんて思わなかった。今まで日本語ででもこんなに長いレポートがかけたことがない。

まとめ

- ・「Language Code (固定言語学習法)」は学習者の言語学習には邪魔なことである。
- ・日本語母語話者の実践では、研究者がアクションリサーチ活動を通して参加者の持っている言語学の「枠」を工夫させた。
- ・学習者が理論・行動的な議論をもとに、参加者の言語学習の観点を広げた。

4) 考察

- ・日本語教育には学習法の「Language Code」が存在しているか。ある場合、どうやって解決できるのか
- ・Online Discussion 活動では、第二言語学習者と母語話者と一緒に活動が行われているが、母語話者に「言葉遣いの言い換え」する場合、学習者に指摘すべきであるか。また、学習者と母語話者との「立場的な上位関係」になるのか。
- ・アクションリサーチ活動では日本語教育において実施される場合、どんな活動で実施すればいいのか。

5) 参考文献

Eli Hinkel (2011)、*「Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Volume2」* Routledge

